

月刊

いじろのとも

第七卷

九月号

悪いところも指摘

子どものしつけでは
善いところを
ほめてやるだけではなく
子どもが自己を客観的に
みることができるよう
悪いところも
指摘してやらなければ
なりません

過去へ感謝

自らの
あらゆる過去に
感謝せよ
自己の執らわれ
すべて捨てされ

空しき教育議論

哲学を
欠きて教育
論じても
空しかるべし
後を追うのみ

人生を考え直して

みたい人は（二三三）

『聖書』解説（九）

マタイ福音書の第五章を続けます。

一三あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。

この節も次の一四節も、「地の塩」「世の光」という言葉で共によく引用される、聖書の中でも有名な節です。

さて、その「地の塩」ですが、なかなかユニークな解釈をしている人がいます。一般には、地をこの地上、つまり、「世の光」の世と同じ意味に解釈するのですが、ところが、手島郁郎（一九一〇～一九七三）という人は、『マタイ伝講話』第二巻（キリスト聖書塾刊）の中で、この節ほど誤解されて解釈されている節はないと述べ、この部分も、自分がそこへ行つて見てきたこととして、地の塩は大地が産する塩だと述べています。死海（塩の

湖で、イスラエルとヨルダンにまたがる）のほとりで見られる天然の塩のことだとしています。また、次の「塩が塩けをなくした」の部分も、にがりになったものとか、効き目が薄くなつていくことだとか、いろいろの解釈があります。これはそうではなく、塩けのない芒硝（ぼうしょう）という天然の塩をとる時の副産物のことで、それは、ガラスに近く、危ないので踏みつけて麦わらで覆っておくものだとしています。

なかなか、こつた解釈ですが、でも、それほど字句に執らわれなくてもよいように思えます。たとえばそれが事実だとしても、そんな事実を知らなくても、もつと言えは知らない方が、あるいは、執らわれない方が、この文の真意をよりの確に感じる事ができるからです。

以下、私なりの解釈を示してみたいと思います。まず、地ですが、よく「天地」という熟語で使われますように、私は、この地も天に対するものとしての地だと思ふのです。

ということとは、天に居られる神の、その摂理をこの地で行うものとして、私たちが存在していると考えてのことではないかと思うのです。天と地はそういう関係にあるのではないかと思うのです。

そして、神の摂理を行う働きの「たとえ」が、塩とい

う言葉で表されていると思うのです。

では、それは、どんな働きなのでしょう。その答えは、いろいろある塩自体の働きのどの部分を重視し、それをどう解釈するかで変わってくるように思えます。

塩は、一般的に、食品とされますが、食品としては食卓塩がありますように、あらゆる味の基本だと言えますし、また、身体的な生命維持や健康維持に欠かせないものでもあり、魚や野菜に塩をまぶして水分を出させて味を整えたり、それらを塩漬けにして腐敗を防いだりします。食品以外ですと、お相撲さんが土俵でまいたり、お葬式から帰って自分に振りかけたり、水商売の家の入口に盛ったりして清めのために用いますし、歯を磨いたり、うがいをしたりするような薬品としても使います。

また、他の食品と比較してみますと、塩は砂糖のように、貪って食べるようには味を付けてくれません。入れ過ぎれば辛くて食べられなくなってしまうですが、砂糖は少々多くても、大抵はおいしくなってきました。また、砂糖は食べなくても生命に別状はありませんが、塩はそうはいきません。

「あなたがたは、地の塩です」と言うときの、塩とは以上のような働きをすべて含んでいるものと理解してはいかがでしょうか。

キリストの弟子であり信者である者は、人間の存在の

根幹をなすものとしての働きをしなければなりません。人類の生命と健康を維持し、人々のもっている善いところを引き出し、社会的な腐敗から人々を守るのです。そして、人々のところを清め、毒（仏教では、貪瞋痴の三毒）を浄化する働きをしなければなりません。

しかし、それは安易に流されたり、貪ってできることではありません。常に節度をわきまえてはじめて、できることなのです。執らわれて度が過ぎますと、苦しむことになりますし、健康を害することになってしまいます。仏教で言いますと、中道を守ることが大切だと言えるのです。

では、もしこうした働きが社会からなくなったら、何が補うことができるのでしょうか。それが続いて述べてある「もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけたでしょう」という部分です。

多くの解説書は、この「塩が塩けをなくしたら」という部分の解釈をいろいろ現実のこととして考えるようですが、「もし」ということです。そんなに深刻に考えることはないように思えます。素直にもしそうなったら、と考えればいいように思います。

もし、塩けがなくなりますと、それに変わるものは、

私は化学の知識が豊富ではありませんが、現在でもないのではないのでしょうか。

もし、そうなりますと、何の役にも立ちませんので、外に捨てられて、「地」上でのことですから、人々にふみつけられるだけだと言えます。

以上が、多分普通の解釈だと思うのですが、ここで、神の摂理たる塩の働きをこの地上で人間が行うことが、果してできるのでしょうか。そこが一番の問題だと言えるのです。

キリストは「あなたがたは、地の塩です」と言われるのですから、できないことではないのです。でも、パウロが布教しましたような、いまのキリスト教では、とうていダメです。

パウロ・キリスト教では、神と人間の間には断絶があつて、人間は原罪を背負つて生まれ、決して神に至ることはできません。ただ人間の悔い改めと神の許しによつてのみ、人間が幸せになれると思つています。

ということ、人間は人間であるかぎり、どこまでいっても、いわば永遠に過ちを犯し続ける存在で、それを超えることはできません。ただ、神にその過ちの許しを乞うだけです。

だとしますと、たとえ許されたとしても、過ちを犯し

た事實は事実として後に効果を残していきます。神の許しによつて、キリスト教的罪は消えるかも知れませんが、人間の犯した過ちは歴史として、蓄積されていくことになります。ますますこの世は過ちで満ちあふれることになります。現在、まさにそうなっています。

ということは、このままのキリスト教では、地で神の摂理を行うことはできないということです。

過ちの蓄積は、人類全体の生命の維持や健康の維持を危うくしています。

例えば、経済的・物的欲望の追求は貪欲という悪を犯させ、それを蓄積しています。オゾン層の破壊によるこの「地」の放射能汚染、原子力の問題、炭酸ガス発生による増大による地球温暖化、自然破壊による地球規模での気象異常、文明の発展による難病の発生とその世界中への伝染、などなど数え上げればキリがありません。

また、社会的な腐敗は、日本の国内でのいまの薬害工場の問題をも、住専問題をも、オウム真理教をもみて一目瞭然です。

また、人々の心の汚れは、小学生、中学生を始め、多くの人々の心の健康の問題を生み出しています。

このように悪や過ちは、確実にこの地の上に蓄積しています。このまま行けば、おそらくそう遠くない未来に

人類は滅亡することだと思えます。

では、神の摂理がこの地上で行われるにはどうしたらよいのでしょうか。パウロ・キリスト教がダメだとしたらどんなキリスト教があるのでしょうか。そのことを少し考えてみたいと思います。以前の繰り返しになると思いますが。

これまで何度も述べましたように、私たちは、無意識の中に、絶対に永遠で無限な「如来・神」という「霊」を宿しています。それは、私たちの意識を超えたものです。ですから、意識して知ることはできません。

現代人はあたまばかりが偉くなり、理性しか信じられなくなってきました。しかも、本当に信じるのは自分の理性だけです。

でも、理性を離れ、聖人の言われることを信じて、毎日まいにち、自らの修行によって、自己への意識の執らわれを清めて下さい。そうするとき、自分の中の「如来・神」の存在を、理性では知ることができなくても、人間の精神全体で知ることができるのです。

そのとき、それは「聖」なる価値として私たちに実現されてくるのです。そして、私たちは神の摂理を、この地で実践することができるようになるのです。

そうキリストは説いている、と私は思うのです。

自作詩短歌等選

池のメダカ

散水の
ジョロに残りし
メダカ飼う

基本が大切なのに

いまの子どもは
基本が

できていないのに
応用ばかり
しようとする

カラスの残した

カラスさん
残したもろこし
うまかりし

一つの間違い

宗教家
百言正しく
言おうとも
一つの間違い
言うならば
百言すべて
アワとなりけり

敗北に転ぜられない

法句経（一四、一五）

自らに

打ち克つことは

他の人に

勝つことよりも

すぐれてる

いつも行為を

つつしみて

おのれとのえ

いる人の

克ち得たものを

敗北に

転ずることは

神・天も

悪魔も梵も

為すことできず

遠く及ばず

法句経（一八）

この世にて

功徳を得んと

一年間

いけにえささげ

神まつり

火にささげもの

しようとも

それらすべてを

合わせても

行為正しき

人々を

尊ぶことに

遠く及ばず

中国女性の自己主張

中国で設立された

女性のための

駆け込み寺

「新しい太陽」の

壁には

自立

自尊

自信

自強

と自の付く言葉だけが

四つ並べてある

真に

必要なものは

人を尊ぶこと

人を信じること

人に譲ること

見えない

自己が見えない

他者が見えない

さきが見えない

水の味・人のこころ

関東の軟水は

好きだが

関西の硬水は

口にあわない

という

水の味で

暮らしを豊かにする

余裕があつたら

人の心を感じるこころを

ちよつとは

豊かにしたらどう

自作随筆選

暴力教師

いま、六回シリーズで、NHK総合テレビで水曜日の夜十時から四五分間「暴力教師」というドラマが放送されています。テレビ欄で題名をみて、初日は眠い目をこすりながら見ました。あとはビデオ予約で録画して二回分見ました。

それを見ての感想ですが、学校はいま大変なのだあらためて思いました。何が大変なのか、ずっと前に、ときたま「金八先生」を見たことがあります。その頃よりずっと変わっていました。何が変わったのか。それは、子どもたちの先生に対する態度です。

金八先生のとくも生意気なことを言う生徒はいましたが、でも、何か生徒には先生に対する尊敬、とまではいえないまでも、信じるものがあつたように思うのです。ところが、このドラマをみていますと、そんな先生に対する尊敬や信頼は、昔は親がそうだったと思うのですが、まったくないように思えてきました。

生徒は先生と殆ど対等です。もちろん同じ人間として

お互いが尊重し合わなければならぬことは言うまでもありません。でも、何かを学ぶためには、学ぶ側は心を開いて謙虚に、教えを乞うものに耳を傾けなければなりません。もし、そうしなければ、たかだか知識は得られるかも知れませんが、考え方を得ることは不可能に近いと言えます。

言うまでもなく、人間が生きていく上でもっとも大切なことは、その人の考え方であり、その人の根性です。知識ではありません。

対等だという意識は、生意気な態度となって現れます。先生への敬語が無くなって来ています。

主人公の先生が雑誌記者に、つい感情的になって「言つて分からない者には、体で分からせる以外にないのだ。暴力は必要悪だ」と言つてしまいます。先生の権威がなくなつた現在、生徒を立たすといつた軽い体罰すら使わず、言つてきかすだけで、不適應に陥っている生徒を指導することはとても難しいと思います。もし、学校が荒れだせば、国家暴力である警察力を導入する以外に秩序をたもつことは難しくなつてきています。

なんとか、暴力や体罰のいらぬように、子どもたちの「大人の権威への信頼」と「従順さ」とを取り戻さなければ、社会はますます崩壊の速度を早めます。

釈尊のごとば（五〇）

法句経解説

（一七六）唯一なることわりを逸脱し、偽りを語り、彼岸の世界を無視している人は、どんな悪でもなさないものは無い。

この偈の出だしの「唯一なることわり」とは何なのか。なかなか難しい偈のように思われます。因みに、友松圓諦著『法句経』（講談社刊）では「唯一なることわりを逸脱し」という部分を、「一つの法といえどもこれをまもらず」と訳しています。

これでは、両者では全く意味が異なってきました。友松訳では、一つの法も守らないわけですから、最後の部分の「どんな悪でもなさないものは無い」という言葉と同語反復しているようなものだと言えます。

ここでは、勿論、友松訳よりも、より深みのある中村訳で解釈していきたいと思えます。

では、「唯一なることわり」とは何なのでしょう。私は、それは哲学的に言えば、宇宙根源の原理だと思います。仏教の中の真言密教で言いますと、大日如来、あるいはこの世を大日如来の自己顕現だと考える、という

ことに当たっています。

人間は自分で生きている、と傲慢にも思いがちです。人間以外の生き物、あるいは物も含めてこの世の存在者は、自分が存在していると意識することはありません。ただあるがままにあるだけです。将来のことを思い悩んだり、ずっと先の死を怖がったりはしません。また、過去をよくよくと、いつまでも考え続けて悩んだりもしません。ただ、起こることが起こるだけです。

ところが人間は、違います。もつと長生きしたい、もつとまじな生活をしたいたいと思いますし、自分が為してきたことを振り返って後悔したり、他者との関係で心が痛み、悩んだりします。

では、「唯一なることわりを逸脱する」とは、何なのでしょう。ハイデッガーという哲学者の言葉で言いますと、自分が、ただ「贈られてある」だけだということを忘れるということです。先程の密教でいいますと、大日如来によつてただ生かされて生きているだけなのだ、ということが分からず、そこから逸脱するということです。

もし、このことがよくわからない方は、「自分がなぜ自分の望むようには生まれて来なかったのか」「なぜ自分は年老いて行くのか」「なぜ自分は病気をするのか」

「なぜ自分は死んで行かなければならないのか」を考
えてみていただければ、よいのではないでしょう。きつ
と、すべてについて理由が見つからないのではないかと
思うのです。

それは、すべて私たちがのほからいを超えた力によつて
決められていることだからなのです。宇宙根源の原理に
よつて決められているのです。大日如来のおほからいで
決まっていますことなのです。

自分の出世が思うようにはいかないのも、自分にお金
がたまらないのも、自分が事故にあうのも、自分の子ど
もが思いどおりにならないのも、みんな自分を超えた力
によつて決まっていますことなのです。

私たちはそれから逸脱しないで、ただ、従うだけなの
です。自然随順なのです。それを不幸なことと思つては
ならないのです。

ありがたいことには、私たち人間には、自分の生を意
識するかわりに、自分が「ただあるがままに生かされて
生きている」という心境に至る道も用意されているので
す。何が起こつても失敗だとか、不幸だなどと思わな
いでもよくなる道が用意されているのです。

それが、偈で次に出てくる「彼岸の世界」なのです。
人間は、必ずそこに達することができます。でも、何か

の理由で、たとえできなくても、できた人の教えを信じ
て、ひたすら修行するとき、無限にその近くに達する
ことができるのです。消極的に言いますと、「彼岸の世界
を無視しない」ということになるのです。

彼岸を無視し、信仰を失い、彼岸に達しようと心掛け
ない人、そうしようと精進しない人は、一つ為すごとに
悪をなすのです。「どんな悪でもなさないものは無い」
と言えるほど悪をなすのです。また、そういう人は「偽
りを語る」ことにもなります。大多数の哲学者が「唯一
なることわりを逸脱」して、「偽りを語つて」います。
私の勤める大学でも、同じ障害児の幸せを目指すはずの
教官の多くが、悪を為し、偽りを語っていることを、彼
らと接する度に感じます。

しかし、難儀なことに自分では悪を為しているとも偽
りを語っているとも気付いていません。自分ではよいこ
とをしていると思つて悪を為しているのです。無明の間
をさまよつていいると言えます。悲しい限りです。

障害児が真に幸せになるためには、自分の為す悪に気
付き、それを克服しようと精進する以外に道はありません。
ん。そうすることで、ここでいう彼岸の世界が来なけれ
ば、それは不可能だと言えるのです。そうした彼岸の社
会を実現することが、私が生きている意味なのですが。

(一七七) 物惜しみする人々は天の神々の世界におもむかない。愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし心ある人は分かちあうことを喜んで、そのゆえに来世には幸せになる。

この偈はそんなに難しくないように思えます。仏教でいうお布施の徳を讃えるものです。

まず、「物惜しみする人々は天の神々の世界におもむかない」という部分ですが、物惜しみは、他者に対して分け与えないことです。自分で独り占めすることです。

私は、質素儉約を心掛けていますが、それとは違います。質素儉約は、物を大切にすることやむだづかいをしないことですが、物惜しみは、他者に対して物を惜しむこと、いわゆるけち、吝嗇(りんしょく)のことです。私たちが住みよい社会を作るためには、お互いが分かち合うことが必要なのです。人間は独りで住んでいるわけではありません。お互いがお互いに依存し合いながら生きているのです。人生では必ず困ることが起こります。そのとき、助け合うことで人間はどれだけ安心を得ることができのでしょうか。身を惜しまず、財を惜しまないで助け合う精神を物惜しみしないこと、お布施というのです。

そして、そうした物惜しみしない人々は、死後、天の神々の世界におもむくことができるというわけです。釈尊の時代、インドでは輪廻思想が一般的でしたから、輪廻を断ち切るのが最高なのですが、断ち切れなくても、輪廻する所としては、天界が最高で、物惜しみしない人は、その最高の天界に輪廻して生まれ変わると言うのです。

続く部分もほとんど同じことを言っています。「愚かな人々は分かちあうことをたたえませんが、「心ある人は分かちあうことを喜んで、それゆえに来世には幸せになる」というわけです。

釈尊自身は来世(死後以降の未来)も前世(誕生以前の過去)も、共に超越して、永遠の現在のみを生きてもられたと思います。でも、当時の「人を救う方便」として、ここでは来世のことをいっているだけです。

仏教者の口から、いま不幸なのは前世の因縁だという言い方が、時々なされます。たとえば、障害児が生まれるのは、あるいは差別をうけるのは、先祖がどこそこでこんな悪をなしたからだ、といった風にです。

でも、そんなことを釈尊はおっしゃっていません。どこまでも、人を救う方便です。人を不幸にするものではありません。

(一七八) 大地の唯一の支配者となるよりも、天に至るよりも、全世界の主権者となるよりも、聖者の第一階段「預流果(よるか)」のほつがすぐれている。

この偈で分かりにくいのは、最後の方の「聖者の第一階段「預流果(よるか)」」という言葉だと思うのです。

「預流果(よるか)」と言いますのは、仏教の専門語で、さとりの方向に向かう流れに乗った境地で、ここにある通り、聖者の入口に相当するさとりなのです。

ですから、この偈の言いたいことは、第一階段のさとりでも、他のどんなものよりもすぐれているというわけです。

「大地の唯一の支配者になる」とは、この世界の統一をなし遂げてその支配者になる、ということだと思えます。でも、これまで誰もなし遂げていません。ジンギスカンもナポレオンもヒトラーもなしえなかったことです。そのなしえなかったことよりも、もつとさとりの方が優れているのです。

次の、「天に至る」ですが、これは、このすぐ前の偈にありましたように、死んだのち天に生まれ変わることに

です。天に生まれ変わるよりも、さとりの方がよいと言いますのは、実は、天に生まれ変わっても、また輪廻しなければならぬからです。

次の、「全世界の主権者となる」と言いますのは、この地上(大地)のことだけではなくて、あの世も含めて全世界、もつと言いますと、あらゆる時間とあらゆる空間を含む宇宙といってもいい世界の主権者となることです。それよりもさとりの初階段の方がよいということなのです。

さとりとは、そんなによいものなのです。なぜなのか。それはこの身のままで、いま、ここに、永遠のいのちを得るからです。あの世もこの世も超えて、未来も過去もすべて統合されて、現在の、このみか意味をもつ世界に入ることが出来るからです。それは、全てに満たされた世界にいることだと言えるのです。

でも、これは、あたまで考えてそうしようと決心すればできることではないのです。あるいは、自分はそう言ったと信じたぐらいでなれるものではありません。

聖者の教えを信じ、その教えを守り、ひたすら、ただひたすら修行しなければなりません。そうする時、はじめてさとりの第一段階に達することができるのです。

どうか、修行にお励み下さい。

後記

一、少し雨が降り、畑物はうるおいました。でも、池には水はほとんどたまっていません。

二、私が作らせて頂いている畑に近い畑で、さつまいもが、なん畝にも渡って掘られてしまいました。数日畑を見回らなかつたうちに、掘られたようです。どうも、猿が掘つたらしいということです。からすなら、食べ残しが多いし、数日で掘ってしまうということはありません。いのししはこの地方では出たことがないということです。どうも猿らしいということです。うちも気をつけるよう注意して下さいました。

三、徳島県三好郡山城町にいるころ、畑のさつまいもだけではなく、さともも大豆も、いのししに食べられてしまったことを思い出しました。

四、猿やいのししも山が、ひのきやすぎで植林され、荒れて、食物がなくなり、里に下りてくるのだと思います。でも、農家も困っています。

五、なすの切り込み剪定の甲斐があつて、また、実がなつてきました。先日、収穫して食べましたが、秋なすは嫁に食わずなというだけあつて、とてもおいしいものでした。さつまいもも数株づつ掘ってきて、食べています。近所に差し上げましたら、たいへん美味しいと言つて下

さいました。

六、九月二日に、自閉症児の時間障害についての論文を鳴門教育大学学校教育研究センター紀要に提出しました。

私の時間論の概要も含まれています。ご希望があれば差し上げます。お申し出下さい。

七、九月七日久しぶりに高知に行きます。現職教員の卒業生の方との研究打合せのためです。ついでに、古本屋さんも廻つてくる積もりです。

八、九月九日から四日間、私のゼミの大学院生と共に、岡山の奥津温泉の近くの民宿へ勉強合宿に行きます。ついでに、この時も、岡山の古本屋さんを巡ります。

月刊 こころのとも 第七卷 九月号 (通巻 八十一号)	平成八年九月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしなり</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

